（六號活字記事）　墓場（[illegible]）　婦人問題（氏[illegible]）　婦人と[illegible]書（主人）　[illegible]七（四郎）　婦人の目的（[illegible]治）

世界婦人

墓場

石川三四郎

△世界は墓場である

鬼が馬車に乗て急いで行く。幽靈が鍬を擔いで歩いて行く。電車が通る。荷車が通る。人車が通る。自轉車が通る。馬が通る。船が通る。が、人間は一人も通らない。東京の街は可なり廣い。其の廣い街に活きた人間に出會つたとが無い。暫くは知らぬが、廻つて歩いたら日本の國もソウ狭くもあるまい。が、活きた人間にはドウも出會ひそうに思はれぬ。

東京は墓場である。日本は墓場である。世界は墓場である。有りとし有らゆるものは皆死んで居る。唯だ鬼と幽靈が居る。

△餓鬼と幽靈

林の如く煙突が立つてある。何々銀行、何々省、何々院、何々局、何々署など、言ふ墓がある。是は日本といふ墓場の中で最も貴重な本家本元の墓である。其に次いでは何々會社何々商會杯いふ墓がある。更に他方を見れば、何々大學、何々學校、何々工場何會、何々議會などゝいふのがある。

墓場は死人を葬る所である。活きた人間の居住すべき筈が無い。今、日本といふ共同墓地を見ると、鬼と幽靈が滿ちて居る。死絶れた奴が鬼となり、死絶れぬ奴が幽靈となつて中に迷つて居る。馬車や自働車に乗つて驅け廻はる鬼がある。人力車や自轉車で走り廻はる鬼供に至つては何十萬居るか知れぬ。東京市中を見ると此鬼が血眼になつて奔走して居る。彼等は皆な餓えて居る。成功に餓えて居る。驕慢に餓えゐる。虚榮に餓えてゐる。權力、金力に餓えてゐる。名利色慾に餓ゑてゐる。位人身を極めても、富巨萬を貯えても、尚且餓えて居る。彼等は我が慾に餓えて居る。彼等は無限に餓えてゐる。彼等は絶對に餓鬼である。

無數の幽靈が彷徨ふて居る。彼等は死切れずして既に疲勞して居る。鬼は希望を持ち、比較的成功者又は成功を企圖して居るものであるが、幽靈は多く失敗者である。然らずんば奔走に疲勞して發達の希望無き輩である。

彼等は何々官とか、何々員とかいふ戒名を持つて居る。彼等は人間ぢや無い。其餓鬼や幽靈の彼等は、朝に何省、何銀行、何會社、何工場といふ様な墓場に行て、夕に家庭といふ墓場に歸る。其内鬼族に屬する者は時々相場をやる。賭博をやる。醜業婦を買ふ。此等の場所は墓場の中の地獄である。

△幽靈の未來

幽靈の同類は數が非常に多い。彼等は勿論俥に乗れない。多くの者は電車にも乗れない。彼等の多くは皆工場に通つて居る。彼等は未だ死切れずして中に迷つて居る。一たび活を入るゝ時は必ず人間に返つて、眼を醒すであらう。イヤ醒すに定つて居る。既に眼を醒しかけてゐる。彼等は今ま、喪家の犬の如く痩せ衰えて、世界中に吾等の因縁無しと呼んで彷徨ふてゐる。が、一朝覺醒の時は如何になり行くであらうか。

幽靈の小供が何百萬といふ程ある。彼等は何々大學、何々學校などゝいふ墓場に群を成して集つて來る。彼等は未來の幽靈である。彼等の多くは學校といふ墓場を卒業して直ちに一人前の幽靈となる。彼等は學校を出たら、直ちに鬼群に投じて、血眼になつて大に驅け廻はらうと心懸けて居る。が、仲々甘く行かぬ。多くの者は中途で幽靈になる。鬼の先驅に蹴倒されてフラ〳〵墓場中を彷徨ふ。小供幽靈の將來は實に暗憺たるものである。

△鐵棒持た鬼

鬼は鬼だけに兇惡である。權力と金力とで強迫的又は誘惑的結婚をする。時々は強姦もする。或は賄賂を取る。人を殺す。殊に外國の鬼供と戰ふ時は一時に幾萬人といふ程殺す。我が墓場に歸りては疲勞した幽靈を壓制して其膏血を搾る。青ざめた幽靈なれば素より血は少いが、然し數が多いから總體を數へれば夥しいものだ。そして幽靈は益々衰え〳〵鬼は益々兇惡となる。

が、鬼は鐵の棒を振つて幽靈を壓制するばかりで、自分では何等の生産をもしない。幽靈がフラ〳〵ながら汗水流して生産したものを鐵の棒で以て強迫して奪い取る。幽靈は殘念だとは思ひながら、鐵の棒といふ強迫機械を持たない。其壓制に服從しなければ自分が其墓場に住居するとが出來ないので、巳を得ず鐵棒の下に驅使はれて居る。其實狀は實に悽慘たるものである。幽靈は息まず働いて居るけれども、我が生産の大部分は鬼の奪ふ所となるので、何時でも赤貧である。何時でも權力勢力が無くて、地を確かり踏んで行くとが出來ぬ。中にブラ下つて居る。風のまに〳〵吹廻はされる。在りて無きが如きは幽靈である。

△幽靈の蘇生

が、幽靈は未だ惡に生れ更つた譯では無い。唯だ中途に迷つて居るのだ。今ま活を入るゝや直ちに人間に生き返へる。イヤ既に生き反て頭を擧けやうとして居る。此幽靈群が生き反つて來た曉には餓鬼を地獄の奥に逐込んで、此墓場を活きた人間の樂園とするとが出來る。是は甚だ容易いとである。幽靈が眼を覺せば善いのだ。

處が鬼は能く此未來を知つて居る。兎に角現在では活動的で智識に富んでる彼等のとなれば、幽靈覺醒の防害をさ〳〵怠らない。常に其獨特の武器たる鐵棒を以て鎭壓して居る。今や實に幽靈群が其戰の時代である。けれど其鐵棒は遂に其靈に及ばないと素より當然である。鬼に強けれど弱きが如く見ゆる者は幽靈である。鐵は必ず靈に亡ぼさる。未來は幽靈の世界である。

△商業主義

コロンバスが亞米利加を發見し、ワスコダ、ガマが印度航路を發見して以來、地方的土着の産業は工業都市に集中せられ、全世界は商業主義といふ空氣を呼吸するに至つた。廿世紀に至つては如何なる事業も商業てふ觀念を以て行はれぬ者は一つも無い。會社といふ團體が商業をする。學校も教育といふ商業をする。官署も行政といふ商業をする。國家も商業をする。帝國主義又は商業的カイザリズムなどゝ言ふ語の起る所以である。

此商業主義が世界の人類を殺した。廿世紀開幕の世界を寂しき墓場とならしめた。人類は皆な餓鬼と幽靈になつて了つた。或者は貧乏にして餓えて疲れ、幽靈になつた。或者は金持にして且つ餓えて狂ふて鬼となつた。

商業主義は封建制を打破して立憲制を樹てたが、其れと同時に古來の村落自治生活を破壞した。古の樂しい村落生活は殆と痕跡をも失つて墓場となつた。古の農夫は鋤鍬を持つた儘で商人になつた。幽靈になつた。鬼になつた。二十世紀の世界は是れ幽靈と鬼と狂ひ勞れた墓場である。

血と涙を要します

女學生

人は教育せられると無條件な屈從を拒む様になる、權利を認める者が壓制を否むと同様である、其れは人民一般さうである、社會はよほど女學生を攻撃する様だが何故そんなに惡しさまにいふのだらう、女學生とても同じこと、五十年前の日本在來の女子とは違ふんだもの、女大學を以て最高と考へてゐた時代はもは[illegible]である、今の女は、英語を學ぶ、獨逸語をはなす、音樂を研究する、哲學書を讀む、そして片時も書籍をはなれ、新らしき世界の潮流に觸さうと心掛けてゐる、新文明に浴した女子はどうしても十九世紀式の家庭、社會に一致するとが出來ぬ、そこで衝突せざるを得ない、最も眞面目に人生を考へた時、究極の理想を考へた時、よし現在の社會より生意氣とよばれ、お轉婆と嘲はれても自己の所信に向つて突進せ様とする、かうなつた以上は、社會がいかに罵倒しても、もう駄目、思想は自由なもの、いかなる方面へでも發展する、よく壓すれはする程拔けて行く。

さうです、現社會は最も文明に浴してゐる青年の取扱ひに手古摺つて居る、どうして制へつけ様かと困つてゐるのです、そして自分の手にあまる時は、惡口[illegible]吐く、女子に教育は不必要だとか、外に大望があるの、[illegible]國語するのとか、[illegible]子教育は不必要だとか、國會の議達の様に、東京などへ出せは『國際する』といふ人を見れば、其口を誤は曲げてやりたい、其頓へ[illegible]をはつてやりたいと思ひながら、其人間が可哀相で、親の爲でたまらない、可愛ゆい自分の娘に十有八九弊害こした教育の[illegible]はそんな、柔弱なものだと思ふと、意氣銷然と女學生を痛罵してをる態度も何處かに、弱點がある様に思はれて、憐れつぽくなる。

何故、自分の娘を困難の境遇に出しても、誠意せられない程の人物に教育せなかつた？何故、自分の娘を充分信じて[illegible]の教育をなせなかつた？所謂して育てたる我子を信ずるとも出來ない様な[illegible]な教育かと思ふと、お仕舞にはつく〴〵情けなくなる。[illegible]天下の父[illegible]は確かに自分の子女を疑つて居ります。私は嘲はれる教育を施しされたる現代の青年を親の様に思ふのです。父母諸君、現代の人士が、躊躇する青年の女子の堅固な意志を、何故子女の上に[illegible]せない、或は出來なかつたのか、まして今は[illegible]物の過渡時代である、この過渡時代に臨して誤らない子女を、教養し得なかつた社會人士は罪を獨り青年[illegible]してゐる、實に無責任極まる仕方ではありませんか。

けれど、女學生も責を負はねばなりません、社會の過渡時代には血と涙を要します、其犠牲者たるを甘んずる[illegible]と意志を持たねばなりません、そしていかなる誘惑の波にのぞみても、常に高尚なる思想と堅固なる意志とを持して理想に向つて驀進せねばなりません、社會を革進するは實に青年の力にあるのです、[illegible]であるのです、我等はよく、自己の位置、本務を自覺し、社會を指導して行かねばなりません、而して我等後進の人の第一手段は實に自己の人格を向上させるより始まると思ふのです、お互に誠實ならんとを祈ります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人と社會問題（一）

シュソン氏著
山本生譯

緒論

一

現今の所謂社會主義運動は只に產業の改革のみを意味するに非ずして經濟界に根ざせる總ての事物――文藝、教育、倫理、政治等の改革をも等しく意味して居るのである。單に勞働者の地位の革命てふ事のみに非ずして婦人と云ふ者を經濟的にも社會的にも知識的にも又道德的にも全く變化せしめんとするのである。然るに此の婦人界に對する社會主義――活きたる感化と婦人が次第に社會主義運動の爲に活動せんとするに至れる趨勢とは從來殆ど第二の問題として餘り人の注意を惹かなかつた。

一體現今の社會問題が全く政治問題と化せしに、婦人が政治上に何等の權力を有せない爲め、婦人の勢力は能く立てるまでもない程微々なるものとして處斷されて了つたのである。

「二」

此の一事は社會主義者の見地よりすれば實に眞理を僞るの甚だしきものである。而して又是れ社會に於て高き目的の爲に用ひらるべき一勢力を、輕卒にも無用の屑物の如く判斷し、又我等が注意せざる内に之を他に轉作するものである、實に無定見な話ではあるまいか。

婦人は社會に於て守舊的な反應的な一團を成して居る。而して選擧權を持たざるが故に革命的變遷を排斥する人々に依て好いやうに利用され得るのである。此事實はよく世に承認せられて比較社會學を學ぶ上に於て解釋の一常則となつて居る、即ち如何なる社會に於ても私有權の發生に伴ひて婦人を賤視するに至り、各社會に平等ならざる習俗が獨り婦人間に行はる、有機となる此の一事に於て一度は一般的なりし習俗が近世の進步に依て日々廢止され或は又已に廢止されたる事實を示す確實なる證跡となす事が出來る。

現今此の事實を示す一例は彼のパン燒、洗濯、裁縫等の如き生產事業の大多數が尙舊昔の風を保持して居て現存せる發明を用ひて爲すよりも遙かに古風な不生產的な方法を以て家庭に於て行はれて居る事である

此の保守主義は目今存在して居るけれども此は婦人をして物質的に弱く、知識的に狹く、政治的に無權力ならしめんと力めたる過去の社會狀態の永續せる結果に外ならぬ

「三」

如何なる國に於ても亞米利加に於ける如く資本主義が能く婦人の經濟力を利用せる國はあるまい　如何なる國に於てもアメリカ程多數の婦人を市場に入れ製造工業に從事せしめ書記教師となさしめたる國はあるまい、全く或程度迄婦人は男子に代つて生產を滿たして居る――殊に製造業機械工業商業及運輸業に於て、斯く婦人は今や產業界の一原動力として他の產業上との力と共に數へられねばならぬのみならず、同時に家庭を通して社會に力ある感化を及ぼすのである。然るに只單に撰擧權を有せざる故を以て此の婦人てふ偉大な、ある一團を斥くるは是れ實に社會主義の最も功果ある傳道機關として用ひ得べきものを失はんとするのではないか、然り是れ一度び社會主義の實現せられたる時、我等は倘ほ後方の舞臺に多數の人を殘し置かんとするのではないか、かくして恐らく最も勝れたる美術文學科學の實現を阻滅し、未來の社會をして家庭生活の美を發揮せざるに至らしむるであらう、此の婦人の衰退こそ、やがて人種の衰滅を持ち來すものである。かくて廣き見地より見來れば社會主義の綱領及傳道機關に婦人を包括するのは單に「婦人の進步發達」を意味するに止まらず、更に一層進んで全人種の改良進步を意味するのである、凡て人道の進步發達を確立せんとする社會の制度は、必らず其の人々の社會的平等を助くるものでなくてはならぬ、而して社會的にも知識的にも弱者の位置にある者の爲に其の制度の短所を改る事を忘れてはならぬ。

「四」

多くの人は論爭して曰く『婦人間の傳道運動は必らず農家勞働者間に用ひ來りし方法よりも更に異なりたる方法を要す』と、之れと同じく昔て農民間の運動に就ても其の實狀に對すると異なりたる方法にて行はれねばならぬ」と云はれた事があつた、此に誤謬であつた事が判つた　而して今や此兩者は同じ主義方針の下に傳道されて居るのである。

婦人に對する亦實に斯くの如し、――吾人は以下更に婦人の經濟狀態、婦人に及ぼす資本家的產業、就中婦人の位置に對して社會主義の爲さんとする根本的な指摘をせねばならぬ。

思ひ出づる歌（一）

村田屏川

みやび男と我は聞けるを宿かさず我を歸せりおぞのみやび男　石川女郎

萬葉にある相聞のうたで、大伴田主に歌と理智に執する男子を嘲つて痛快骨を刺す處がいかにも快い、自己を世の中に措き能はず全く世と相離るゝこと能はずして、ぐす〳〵とその日その日を送ると云ふ世間大多數の男子に、王朝の昔から今日迄猶其跡絶えずして幾千年も續くことであらふ、筆や紙の上で立派なことを云ふさも世間の酸いも甘いも解つたやうな連中こそ反て我利我利亡者であることなどに思ひ合せて興味は中々に深い。

現にはさもこそあらめ夢にさへ人目つゝむと見るが侘しき　小野小町

小町集の歌でやむごとなき人の忍び給ふにとある、當時の閨色小町であれば引手あまたであつたその中の一人であらふ、君とわれとはうつゝにけじめあるはよう知つて居れど、夢に君と見ゆるときも猶君はそのけじめを有つて居らるゝことが何となくかなしく何となく寂しいといふので、みやびをと我は聞けるを宿かさずと云ふ[illegible]した趣はないが依然瀟洒に惱める風情、意外に餘情あつて、其の愛は身分階級などに拘はるべきものではない、それも時と場合に止む得ぬとしても、夢も猶世間の思はくを憚る自分の地位や名譽を顧みると云ふ風なのはどうやら[illegible]やうでもあると戀する人の弱味も見えるのが面白い。

磯千鳥みぎははなれずあさりつゝきよきなぎさに世をやつくさん　只野綾女

磯づたひなる紀行中に插むである歌で、比興の趣味が一首のうちによく表はれて居る、水際離れず漁りつゝその一生を卒る磯千鳥のやうに自分もまた生涯をおくりたいと云ふので、泣涙式に行けばわが住む方はわだつみの波打ちよする……とでも出るところ、きよきなぎさは淋いとか清いとか云ふ意味でなく、自分は寧ろ好むところとした、浪寄せ際にいろ〳〵のもの、打ち上げらるゝ中で最も自分の好む處のもの、中に自分の生命を見出す、それに向て全身全力を注がうと云ふので、道學的解釋は禁物、また作者のこゝろではないがこれを相聞の歌に換えて見るも一興であらふ。

作者は寶曆十三年に生れ文政七年に六十二歲で歿した仙臺の醫師工藤平助の女、後同藩士只野伊賀に嫁た。磯づたひの他に獨考三卷、奧州ばなし、昔ばなし、七草各一卷の著がある。

小說「勞働」を讀まず

石川生

『讀まず』といひながら之を紹介するのは甚だ以て不都合な譯とお叱を受けるかも知れぬ。が、マア僕の言ふ事を少し聞いて下さい。

『讀まず』と言つても全然讀まないと言ふ譯では無い。始から終まで讀みとほすといふに過ぎず。所々、此所も讀みしたので之を『讀む』といふ段に[illegible]のである。

僕は之を細讀した上で批評しやうと思つて居た。が、[illegible]僕の知つて居る人となので、[illegible]或ち他の人が奪ひ去つた。僕は[illegible]讀まなくちやならんから早く返せと言つて置いたのに、其人が讀み切るや近所の人が又[illegible]つて行て了つた。[illegible]矢張「讀まず」に紹介せねばならぬ次第と相成つた。

[illegible]紹介せずに置いたら宜からうと御小言かも知れぬが、一日も早く御紹介申したいが僕の衷情、矢張「讀まず」として紹介して一人も多くの人に此書を讀んで貰ひたいと思ふて筆を執るに至つた。

僕は此書を[illegible]して感じた事を有体に言ふ。[illegible]此書は決して[illegible]と思はれた。何だか物たりなく思はれた[illegible]。

僕はオヤッと驚愕して、物たりないと思つたが、其は僕の頭腦が小說を讀ようといふにあつたからだ。『勞働』は決して小說ではない、僕は[illegible]欲して、不意に苦い水を飲まされたのだ。物足らぬと思つたは其筈である。此書は[illegible]じやない、苦い[illegible]である。

此書の内容は、木下君の伊香保生活・[illegible]谷中村[illegible]事件とここに[illegible]した議會問題と[illegible]した實際の事實談である。そして其總ての出來事は[illegible]中に在る時に起つた事實で、僕も獄中で時々此事を耳にして血を湧したことであつた。

僕が此書を一日も早く一人でも多くの人に讀んで貰ひたいといふのは[illegible]である。[illegible]

木下君の煩悶の跡と谷中村[illegible]事件とは現代の日本人の實生活の二方面、社會的と個人的とを最も痛切に代表したものである。谷中問題に就ては村民も一般人も政府者も皆共に苦い經驗を嘗めたのである。今も尚ほ[illegible]つゝある。木下君の煩悶に至つては[illegible]の苦い〳〵經驗であつたらしい。僕の谷中村に親しんだのは[illegible]時代であつたが、木下君と最も親しくなつたのも、同君が煩悶生涯に[illegible]した時であつた。

木下君は今も煩悶して居る。『勞働』の[illegible]は矢張『懺悔』である。煩悶の淵である。[illegible]木下君が來られた時、僕が『トルストイも矢張不安の人ではなくて煩悶の人の樣に思はれるか』といふたら、同君も非常に[illegible]。其時の同君の[illegible]

『勞働』は本郷　昭文堂の發行で、定價は四十五錢。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人と演藝（三）

無一庵主人

△伊太利及び佛蘭西

第十六世紀の中頃、西班牙に次で、婦人が劇場に現はれた國は伊太利である。が、インノーセンー九世は、フヰリップ二世が王の先例に從て之を禁止した、處が其法王の宣言に係はらず、婦人が男子に代つて女の役を務むるといふ事が伊太利の芝居の一常態となつた。而して女優を有する西班牙人や伊太利人の座が廣く興るに至つた。

一五四八年九月、リオンの俳優が、佛蘭西國王及び王妃カザリン、ド、メヂレを饗應したことがある。其藝は非常な賞を博したものであつたが、其主たるものは伊太利の男女俳優の演じた一悲劇であつた。佛蘭西の劇場に婦人が現はれたのは是が始めてゝあつた。但し佛蘭婦人自身が公衆の前に現はれたのは其より十五年の後である。其最初の婦人はマリー●エルニエルと稱んだ。此婦人の現はれた事は佛蘭西劇史上に甚だ重要なる事件となつて居る。蓋し佛蘭最初の常設芝居が其後直ちに設立せられ、同女と同女の夫とが其マネージャーであつたからである。

△英吉利及び波蘭

英國劇場に婦人が加入を見たのは、「復古時代」であると一般に信ぜられる。然しながら、既にクルムエルの時代に、ピユーリタンの演劇反對熱が消滅に歸し、而して、ダーヴナントが、ルトランド館に出演することを許された時「レーヂ、オブ、ローツ」といふ劇のアイアンツの役を務めたのがコレマンといふ婦人であつた。

チャーレス二世の代には、常設劇場に於ける女優演劇が勅令を以て規定された。而して一六八〇年十二月八日は一の記憶すべき日である。蓋し此時の狂言は「オセロ」であつたが、其口上書に、演劇に出づる最初の婦人を紹介するてふ文句がある。之はジョルダンといふ人が書いたのであるが、此人は前に言ふたコレマン夫人のありしを氣付なかつたのである。然らずんば故意に然かく書いたのである。ジョルダンが此口上に暗に示した婦人はアン●マーシャル夫人であつた。可笑なことではあるが、彼は此婦人が既婚者なることを主張して居る。

波蘭に於ては、十六世紀の終りに、伊太利の男女俳優が來て、或は王宮私閑の劇場に、或は公開の舞臺に現はれた。而して十七世紀の初めには既に一人の波蘭女優を見るに至つた。當時、同女優は國劇或は歌舞劇に時々出勤したのである。

△獨逸

女優の劇場に現はるゝこと最も後く、而も女優が演劇の發達に貢獻すること最も多かつた國は獨逸である。

一六七八年頃、ライプシック大學生徒は一校長ヨハン●フェルテン氏を座長として一座を組織した此俳優はサクソニー候よりして永久的許可たるの認許を受けたが、是ぞ獨逸宮廷演劇の創始であつた。

其マネヂャーの妻君たるフェルテン夫人は、即ち又、最初の獨逸女優であつた。然るにヨハン●フェルテンの死後は、其一座の支配も勢ひフェルテン夫人の手中に歸したので、彼女は最初の獨逸女優たると同時に、又、最初の女マネーヂャーであつた。

フレデリカ●カロリネ●ノイベル、通稱ノイベリンは劇壇上のライプシック派の創立者であつた。彼女は、高尚なるドラマ劇目を創始せしことに於て、又、獨逸に於けるドラマ藝術の地位を高上せしめたことに於て、他人の及ばざる所である。獨逸劇史家の言ふ如く、彼女は獨逸の演劇と時代の間に於ける溝渠を除却した人である。ノイベリンの生涯は、當時流行の下劣なる道化狂言に對する爭鬪の生活であつた。而して彼女はドレスデンに近き一寒村に於て、貧しき、寂しき、悲哀の中に隆盛として逝いた。其より久しき後に建立せられた紀念碑の銘には獨逸演劇の藝術趣味開拓者と記してある。是れ彼女が當然受くべき稱號なると素より動かすべからざる所である。

塩鮭

河南子

私は梅雨の日の鬱陶しさに、本棚の中を探すとはなしに探した、なにか讀み古ふしいものでももう一度これを味はふて、くさくさするのを忘れやうと思ふて……。

すると、いつであつたか太陽に〇〇氏の書いた散文詩の『大豆を賣りて皿の上に載せたる鹽鮭の肉、鹽鮭何の罪の行き（?）かを思ひ出す、見ると露所は新緑の梢頭をかすめて斜めに窓を打つ、眞向ふのプラットホームには今日は一人の乘客もない「鹽鮭何の咎の香もなき」……。

低唱の私はふと放たれ人の末路を思ふた「大豆を賣りて皿の上に載せたる鹽鮭……」期し得たる結果に達すれば、さはや情趣は失せはて、たゞかはいゝたと云ふことはかりである。

私は今朝〇〇からの消息があつた。彼は私に一家の主人になれといふ、一家の主人として才能ある人を定めよといふ、してもしそれが實行出來ねならば、勧れぬことにせうと云ふ。私はこれを讀むで、また鹽鮭を想はざるを得なかつた、して放たれる人がかくして囚はれたる人となる時は、實は生に對する努力の興味が失せて居るのではなからうか。

私はふとこんな時に世の學者先生が「花の結びて實となれるのみ」と云はるゝのであらうと思ふた。

教訓は可也

村田四郎

極貧の家に成長した少年に手癖の惡いので、ちよく〳〵人の物を隱したり、盜つたりする事がある。

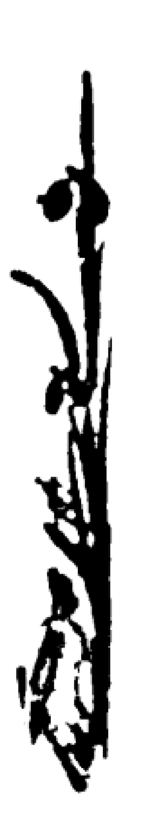
成人が此の少年のする事を見て、可哀そうに、餘所の少年が玩具を持つて居れば此の少年だつて欲しくはなろー、大人だつて摘み喰ひ位するんだもの、まして少年。駄菓子でも見れば、ツイ隱しても喰いたくなるだろー、隱したり、盜つたりする事は當然だ。盜むな、隱すなと云ふ事は、都合のいゝ奴隷になれと云ふ事だ、此の少年は何處までも其自由に振舞ふのがいゝ、手癖なんか惡くても善い。と云つた。

僕考へるに、ソーではない、矢張教訓が必要だ、武士は喰はねど高楊子、渇しても盜泉の水を飲ます、なぞと云ふ處まで云つて聞かして、惡い手癖の自由なんぞは嚴に拘束しなくてはならない。

第一に僕は、此の少年の前途の爲めにケ樣な手癖の惡い習慣なんぞは直して行く方が幸福だと思ふ。教訓丈けぢや直らないかも知れないからより善き境遇に置き替へる事も必要だろー、何れにしても、彼の心の底に正義の觀念を吹き込まなくつてはいけない。此の少年の手癖のわるいと云ふ樣な事は正義の根本觀念からエキスプロプリエーションをやろーと云ふのとは違ふ事だ。

第二に、手癖の惡い少年を其儘自由に放任して、成長後ドンナ風になつた所で、社會改革の理想の上にも事功の上にも、決して有益な結果を齎らしはしないと思ふ。

だから僕は惡い習慣を得た少年等に對しては教訓が必要だと信ずる。



編輯餘錄

石川生

△本號も八頁にて申譯ありません、豫約もあり、是非十二頁に致したいと思ひましたが、御承知の[illegible]には責められ、七八兩月は出版界の死月とも申して居る月なれば、幾少の節約を行つて此困難を切り脱けたいと決したのであります、事情御諒察の上[illegible]を希ふ。

△[illegible]以來、諸方より[illegible]御厚意深く感謝致して居ります、[illegible]、甚だ申譯ありません、[illegible]。

△前號の[illegible]に就き、[illegible]て出版せし所、[illegible]の「婦人解放論」、[illegible]氏の「婦人參政權」、かの子氏の「[illegible]に就て」、其他「[illegible]」、「[illegible]」いづれも[illegible]るものとして[illegible]な參りました。其、[illegible]の記事を發表する時は一々處分すべしとの御達がありました。諸君御承知置きを願ひます。

△此頃は此小さき本紙上に於ても種々ある討論が持上りました。[illegible]を初めとして、婦人解放の可否論となり本號には村田四郎君の「教訓は可也」といふ短文が出て居ります。村田君のは前號の[illegible]君の「[illegible]」に反對したものと考えます。

△かの子君は[illegible]某女學校の教師をして居らるゝ人にして[illegible]なる基督教信者であります、君の反對に對する[illegible]な試みたいのですが、[illegible]ません。

△の、要するに、各自の宗教的評論や、時代觀の相違から來る所の分岐に過ぎません、唯だ一二點、かの子君な[illegible]見付して置きましやう。

△第一哲學は概念の學なりとは、概念を客体とする學なりとの意である、かの子君は哲學によりて統一的概念が出來るといふが、僕[illegible]で哲學を要せずして出來ると思ふ、科學や直感[illegible]て出來た概念を更に研究するのが哲學であろう。併しそれもカントに至つて初めてそう言ひ得る樣になつたのだ。カントに至つて、初めて「哲學は科學の科學なり」といふ樣になつたのだ。科學によりて引力說、進化論、エトム論、エテル說[illegible]で出來たのは何論だが、哲學は更に其出來上つた概念を研究するのである。[illegible]

△[illegible]

△次に晩年諸君に對する村田君の反對に就て言ひたいことがある。[illegible]

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

我が野女 晚道

編者曰。小生に今日迄何等置付なる君に向かつて致す可く候。言し或は堅筆一契の外、甘て粘抓する所ある可きか。唯だ小生の不文、加ふるに秩序も結なき片々の序述に候へば、解決無情何の労は通じめ先づかい罷き候、唯小生は近來殊に病氣勝ちにて、趣に性感情に惟づいて賃動如何見を擱み、全く隠れ棲でてゝ都つら物憂き野區な樹林に横たへ、うつら／＼と致し居る前已に候。

而して今日午前も、うつら／＼と淡く淋しき歩路を辿り居る時、「若旦那」「若旦那」と呼ぶ聲、庵の東を通ずる道に致し候、其聲の誰れのなるかは小生の熟知する所にて、何用ならんと思ふ間もなく、「什麼も長々お世話様になりました」と申し候。俄破と跳ね起き窓を開きて見れば、「我が野女」は、已に小風呂敷包みを左の側に抱き、蝙蝠傘を右手に杖づいて、我が家を暇乞ひして歸り行く所にて候ひき。

「我が野女」名はとくと申し候、吾妻の山中に生まれ、今年二十四才とか申し候。木挽きの妁にて、去年九月生みたる子はあれど、母親に托し置き、亭主と共に出稼ぎに出掛け來しものにて、小生の家に先月中旬より約一ケ月間手傳ひ與る、筈にて候ひしに候。

何にが故にとく女に對して「我が」と冠するか。甚だ小生の野的趣味に合致いたし故に候。「野女」とは全く野女にて所謂沿世文明の風に觸れず、虚榮虚飾じみたる所爪の垢ほども之れなく、全く正直朴僧にして些の陰險術氣なければに候。

人間は四脚と培過とに制かされて、遂に蟻を吐き、自身に不利益不名譽なる事は包み隱し、以つて自己を鄙い子にす可く馴致されたる動物に候、

然るに「我が野女」は、自己を語るに平氣の平左衛門に候。「妻吾ちやア汽車を見た事アわんめえなア」など朋輩より嘲られても勝ちッ氣の女ながら、「まだ乘つた事ァねえが、高崎へ出た時見た事ァあるよ」と其麼物見ない事を些しも恥かしき事とは致し居らず候。

吾妻の山の中なる事を笑はるれば、「山の中でも三軒家でも、住めば都で花が咲く」「笑はしやんすな三軒家だとても、盆と正月とにや米の飯」と歌つて、都會生活の華だ輕浮など笑んだり、罵つたりするもの、迷妄を、罵倒し返し居り候、

「木挽きした事がありますか」と聞けば、「え丶、亭主の商賣ですから手傳ひます」と申し候。「木挽きの間の時は何にをします？」と問へば、「百姓です。野良に出て麥稗を作つたり、蕎麥だの陸稻だのを作つたり、山へ草刈りに行つたり」と答へ候。

「吾妻の方ぢや女が馬方をするそうですが、した事がありますか」といへば、「え丶、始終です。馬乘りで草刈りに行つたり、駄賃を追つたり」と申し候。小生は何んといつても纖弱なる恁かる女に、斯麼荒ら仕事をさする事を氣の毒と思ひ候へども、先方は何んの二本手のある、同じ人間で夫れしきの事を」といはぬばかりの活潑々たるものに候。

今の亭主とは五年以來の戀中の由に候、一里も離れ居る他村から夜を定めては通はせ、家族の眼を忍んでは温かき衾を樂しみし由に候。非歴那脫科の臆面もなく物語り居り候。

去ればそれ程可愛き男の事に候へば、其の男に對して貞節ありやといふに、其の間斷なくとも四五の間男出來、殊に其の中の一人の如きとは、今こそ縁は分れ居れど一旦夫婦約束までしたとの事に候。何にが故に長年の戀人を出し抜いて、恁くの如き事を爲せしやと尋ぬれば、一ト切り近さん（今の亭主の名）が忌やになつた事があつたからです」と誠に苦もなき話しに候。

嗚呼自由戀愛！ 小生は殆んど「我が野女」の、些の箝制拘束を受け居らざる自然赤裸の心理に、恍然として心醉するばかり欣ばされざるを得ず候ひき。

小生は茲に「我が野女」がよく唄ひたる歌の中の三四を書き付けて見可く候。「誰が逢はうが女房子があらうが、惚れたに加減があるものか」「亭主立てたり間男したり、人にや堅いといはれたい」。「今の若さで一人や二人あるが恥ぢかいないが恥ぢ」

野女が昨年九月生みし子は、私生兒として届け出であるの丶由に候。昨年の春とやら今の亭主の所へ公然片附きたる由に候へば、無論姙娠は其の以前の事と存じ候。誰れの子なのやら判かつたものにはあるまじく候。

殊に「野女」の「野女」たる所以は、彼の女が頭を抑さへらる丶事を絶對に嫌厭する所にあり候。嫁に行きても七六かしき舅姑を厭ふて、亭主と二人して別居致し居りし由に候、放たれたる駒は柵を好むまじく候、小生は尤もの事と存じ候。

子供を母に預けて、亭主を連れて出稼ぎに來たりし「野女」も流石に我が子の身の上をば案じ居り候。「雨の降る日と日の暮れもとは、思ひ出だすよ子の事を」など時々唄ひ居り候。其の聲は流石に悲し氣に聞こえ候。燒け野の雉子夜の鶴、況して人の子の無理ならぬ事と存じ候、

「野女」と我が家との契約期限は、まだ切れざるのに候。今三日ばかり勤めねば所謂年明けとはならざるのにて候。然るに少しの行き違より主婦たる嫂と反感の地に立つや、足許から鳥の立つやうに飛び出して歸り行き候。この時、利益の勘定など彼の女にはなきに候。壓制なき自由の天地！彼の女はよしや貧賤には甘んずとも、恁かる野ならでは生活出來ざるものと見え候。

迎へに來し亭主と共に歸り行く「野女」を小生は裏の小山脊の叢の下まで見送り居り候。脊叢の下より大きな彼の女の聲して種々と我が家の惡口を致し候が聞こえ候。これがせめて我が家に對する「我が野女」の不平鬱憤を洩らしたるものと存じ候。ア丶、洩らせよ／＼。盛んに洩らせよ。小生は雇ひ主としての我が家が、被傭人としての彼の女と利益感情の衝突ありしを、遺憾ながら包み隱し得ず候。

小生は路徐すぐ／＼遠ざかり、最早や二人の聲の聞えぬまで、窓に倚り懸かり居り候ひしが、不圖我れに還つて袂のポケットを搜り、彼の女の櫛に手を觸て候、端の方の五六枚歯の缺けたるにて、物は賤爪に候。昨夜小生部屋へ朋輩と二人してやつて來、色々と話した際落としたるものと存じ候。小生が今朝掃除の際見付け、後程渡さんものと一寸ポケットに入れたるま丶忘れ居りしそのに候。

小生は其の櫛を取り出し香を嗅いで、暫し「我が野女」を偲び候。恁麼事書けば花袋氏の「蒲團」の眞似など笑はる丶か知らねど、然らが偶然の暗合なのにて、決して眞似や倣りやには之れなく候。今度御枉顧の節御目に懸く可く候。

君願はくは彼の缺け櫛を共に嗅いて、「我が野女」を偲び給へ。彼願くは無禮無にして、善く歡いよく笑ふ、然も貧にて勝いにして、東瀛と肥前とを嶽傍の如く「我が野女」の面影、彷彿として君が眼にと映ず可く候。

彼はりに小生は、吾妻の嶽峨たる高山の麗、悠々たる吾妻の野に、安大豊子と共に、或は嶽丈の野に入り、或は野に於て、又な追ひ野を歡はるゝ「我が野女」の自由と平安と共に、來た世の風俗に驅されざる野の女の上に、[illegible]ならん事を祈て止まざる者に御座候。

君よ、小生は文の冗長を恐れて此の邊にて擱筆仕る可く候。然も附記一言の附加し度きは、恁かる「我が野女」の何時まで「野女」たり得可きかて云ふ疑問に候。俗惡なる文明は段々乎として僻地幽谷にまで侵入し行き候、それに伴なうて新聞宗教、玩具道德などいふ紳士閥の附屬品物が、無用有害なる政治法律などいふものを推薦しつ丶、總まて、青縁し頑厭し、遂には野人の一人をも殘さざるまで奪誅し了す可く候。 六月廿四日

消息集

▲石巻良夫君 小生は健康上、始めから公明運動することが出來なかつたので、夫れが習性となつて今日では全然キリスト化せんとしつゝあります。悲しむ可き事か、喜ぶべき事か、一に足下の判斷に俟つの外はない（石川記）

▲長加部寅吉君 [illegible]は一昨六月廿二日午前[illegible]出獄[illegible]、小生外二名の同志と共に出迎へに[illegible]、作監中は衣食住の憂ひなく、[illegible]なら一ケ月でも二ケ月でも[illegible]はぬなど、不相變の元氣[illegible]、こんな中居候、讀書なども[illegible]、病氣せざりし由に候へば御安神被下度候（二十四日[illegible]）

▲門倉甲子造君 小生方へ此頃何所か[illegible]、[illegible]ます、ナニ[illegible]。只五日前迄は一日に少くも[illegible]、別に[illegible]、男子でもありませんが、小生の[illegible]を見るさなしで行つて仕まいます。

▲安藤枯山君 頃日の同志館、[illegible]の新聞雜誌の多くが、[illegible]文字に満たさる、[illegible]、ある熱血ある切實の所作に接し、[illegible]、何とはなしに清新の[illegible]

▲村田四郎君 先日は御大切なる御本を[illegible]、アレから[illegible]ります、吾々は[illegible]んですけれど、[illegible]ないかと思ひます、[illegible]を確定したいものだと思ひます。（石川記）

▲小岡如雨君 [illegible]の高燈の論說上に[illegible]情は[illegible]、只賞女史等を先方として此際[illegible]を望む者もさやかに候

▲西川文子君 先頃より新聞にて[illegible]につき、何かと見るにつけ人ごとの様にも覺えられず、悲しき思ひ致され申候、[illegible]日の間には如何なる不幸の[illegible]存ぜられ申候（田川記）

▲佐治實然君 今日は今日の社會で[illegible]、今日の社會狀態を[illegible]事を為したくおもひます。[illegible]知するものにあらず――[illegible]、[illegible]する所ありて今日の如く[illegible]的の話をなしつゝあるあり（石川記）

▲長谷川二郎君 [illegible]、[illegible]角に[illegible]になりたがつたり[illegible]けなくてはいけぬが、[illegible]れ。（石川記）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

喜劇 伯父か甥か（五）

シルレル作 神崎沈鐘譯

第十場

前役、下僕登場

英子「貴方、一寸お待ちなさつて、先達貴方の御留守の時に小作人が二萬圓手形で拂つて行きましたから、妾が受取つただけ與つて置きましたが、それで宜しいので御座いませうか」

富士「さうか、——（英子が嫂子の中にある手形を取りに行つた後で雅子に向ひし）ちや此方に持つて來い何うしたら宜からうか」

雅子「受取つて置きなさいよ、さうしないと化の皮が露はれるから」

富士「難有い——ちや雅さん、其のお金で僕の借金を片着けて仕舞ふか（英子が手形を取出したる時に）武雄が高利貸に金を三百圓借りて、久しく惱まされて居たやうだから、ちや此の金で拂つてやらう、それが宜い」

雅子「其れは何より結構で御座います、借金の沢山ある兄様のことで御座いますから眞實に武山さんがお可哀想ですわ」

英子「さうだどもね、雅さんの言ふ通り、其の借金を拂つて殘つたので結婚の贈物を買ひませう」

下男「雅子嬢様西洋小間物屋が參りました」

雅子「さう、では何か花嫁の裝飾物を付けませう」

第十一場

富士 家令、下僕

富士（下男に向ひ）「一寸來い、——（雅子の方を向き）公爵へ使者を走らせうね」

英子「晩餐を一緒にしたいからと申したら宜しゆう御座いませう、さうして置けば萬事が便利ですから」

富士（第一の下男に向ひ）「お前はね、寶石屋に行つて何か珍しい物があつたら持つて來いと言へ（第二の下男に向ひ）お前はね、公爵夫人の向島君の處へ行つて、晩餐を一緒にしたいからどうぞお出下さいと云つて來い、而してね——十一時になつたら出發するんだから、四頭立の馬車を準備して置け（家令に向ひ）お前にはね、面倒なことを頼みたいのだがね、何うしてもお前で無くちやならないのだ、氣の毒ちやが頼まれて呉れ」

花助「旦那樣——何う言ふ御用事で」

富士「お前は知つて居るだらう、それ彼の高利貸の[illegible]樣の家は何處か、以前取引して居た、武雄が借金をして居る遊蕩の……」

花助「あア、彼の高利貸の——存じて居ます、何日も旦那樣の——横須賀にお居でなさる旦那樣の手紙を持て度々參りました」

富士「ではお前一寸行つて來て呉れないか、武雄が借金して居る三百圓を持つて、掏兒に掴られないやうにせんと、受取證を忘れないやうにね」

花助「はい、解りました、掏兒なんかに盗られるやうな間抜けでは御座いません」

英子「明日武雄樣が見えたら嘸喜びなさることでせうね、結婚の裝飾品と云ひ、借金の片付いたことやら」

富士「それは最う言ふまでも無いことだが私は——其の喜びや、飾物を見るではなし——何もなれやせん」

第十二場

雅子、富士、英子

雅子（急ぎ來りて武雄に語る）「兄樣速く逃なさい、今伯父樣が淺間樣と一緒に歸つて來てよ」

富士（急いで部屋をまはりつゝ）「惡魔、惡魔」

英子「貴方、何故さうお急ぎなさるの、何處へ這入るのですか」

富士「一寸用事がある、急ぐ來る、急ぐちや」

雅子（に）「伯母樣、サア御覧なさい、小間物屋が美しい飾物を持つて參りました」

英子「雅さんが好いのを見立てゝお呉れ、妾は相談相手になりませう、もう判つて居るのだから」

第十三場

大佐、淺間要、英子、菊江、雅子、

大佐「あゝ思つたより早かつた、英子一寸淺間君を紹介しよう」

英子「一寸御待ち下さい、今丁度小間物屋が來て居ますから、急で參ります、雅さん此方に被入い」（去る）

大佐「小間物屋は暫く待たしても可いちやないか」

菊江「待たす理に行かないんで御座います一寸失禮いたします」（去る）

雅子「御存じの通り、小間物屋は婦人には大切な人なんですから」（去りつゝ、一寸淺間に會釋する）

大佐「何うしたんだらう、二人を殘して皆何處にか行つて仕舞つた」

第十四場

大佐、淺間要

大佐「妙な挨拶だ」

淺間「主人が旅から歸つて來たのに、それを打捨て小間物屋の方に行くのが、東京の婦人の習慣ですかね」

大佐「そんなことは知らないが、何でも六週間位絶縁なくちや歸京が出來んと云つて手紙を出して置いて、突然今日歸つたもんだから、旅から歸つたやうに思つて居ないのかも知れん、些とも驚いたやうな容子が無い」

淺間「あの二人の美人は誰です」

大佐「一人は私の姪一人は私の娘、即ち君の花嫁さ」

淺間「二人とも仲々の美人で御座いますね」

大佐「[illegible]め！私の家は美人は多いが些とも禮儀を知らなくて困る、何程美人でも禮儀を知らなくちや仕方が無い」

第十五場

大佐、淺間、家令、下僕第一、第二

第二（大佐の左側に行き）「旦那樣、向島樣は旦那樣と食卓を共にするは恐れ多いから、晩餐の後ちにお伺ひいたしますと申しました」

大佐「何を言つて居る、公爵夫人に何の用があるのだ」

第二「馬車は十一時には前の方に廻はします」

大佐「馬車——今歸たばかりちやないか」

第一（大佐の右側に立ち）「旦那樣、寶石商人は破産して今晩何處かへ逃走したさうで御座います」（去る）

大佐「何だ寶石屋、寶石屋に金を貸したことは無いはづちや」

花助（大佐の左側に行き）「旦那樣 斯波樣へ參りましたが、病氣で臥て居ました、領收證は此れで御座います」（差出す）

大佐「何の領收證だ、馬鹿者」

花助「其の領收證は、殿旦那樣がお仰になつた彼で御座いますから、何卒御覧なさつて……」

大佐（讀む）「領收證、金三百圓富士武雄殿へ貸分、唯今富士大佐殿より確に領收候也」

花助「旦那樣、如何で御座います、確に領收證で御座いませう」

大佐「領收證には異いないが、何う言ふ譯か些とも解らない、彼の狡猾な高利貸は病氣で寢て居る、己れに領收證を送る、又武雄が金でも借りたのかな」

淺間「では富士君に確かめたら如何です」

大佐「來給へ、マア來給へ淺間君、彼方へ行きませう、不都合な挨拶もしないで、公爵夫人、寶石屋、馬車、高利貸、小間物商人全て惡魔に魅られて居るのちや」

獄中消息

△内山愚童氏（第一信）

君が水の中の生活を[illegible]の手紙を見て噴き出した、そうして監獄へ來て[illegible]比べたらな、[illegible]日本の[illegible]な所でした、僕はかうして本もあり、ノートもあり[illegible]ある此生活にはいつまでたつてもあきが來ない[illegible]君、今までの僕の生活よりも[illegible]はそうと、僕は[illegible]て[illegible]の講義を一二冊いれてくれ玉へ、そうして、[illegible]されば、また外の本は買うて頂くから、[illegible]も宜しく（六月二日石川宛）

△内山愚童氏（第二信）

お手紙ありがとう、君のはむきな昨日いた、[illegible]にならんから止してくれ玉へ、[illegible]君がワザ〳〵横濱まで來て、[illegible]して歸つて居るかも知れの、もしこつちへ來[illegible]に此の手紙がついたなら、本だけ差入れてくれ玉へ、[illegible]の注文の外に差入れの許されそうな文學的の[illegible]本の古いのでも宜しいから、いれてくれ玉へ、君が水平[illegible]へはがきをくれた時、すぐに返事と思ふたが、[illegible]しないので、いづれ京都、奈良、高野の古跡[illegible]を調べる[illegible]りだから、その邊で出さうと思ふて、五月十八日に水平寺を出た、アトうしろを見ると[illegible]のスパイがついて居る、[illegible]には[illegible]り立つて居る、飛びあけてから三年寺を見て、[illegible]しつゝ大津へ往つたのが十九日午前一時よ[illegible]其もかし山門と寺門が戦つたのを[illegible]ベイと共に叡山に登り、其一千年以上の根本中堂や、講堂、戒壇院の宏壯を見て、四明ケ嶽に登り、京都を[illegible]して大津へ下つたが、どうも尾行の爲に其目的を遂げられるので、こゝに目的を更へ、服裝も變へて、伏見、大阪、神戸へ[illegible]を訪ねた、そうして神戸から直行で國府津、直ちに箱根へついたのである（六月廿二日石川宛）

△赤羽一氏

先達は遠路態々面會に御出で下され難有う、久振にて君の平和な顔を見て悦に堪へなかつた、人れにしても[illegible]の温容に接する事の出來なかつたのは[illegible]僕の人相の變たのに驚いたろう、あの元氣[illegible]、僕はドウしても社會から嫌はれるやうに出來上つて居る、僕は[illegible]毎日〳〵十二時間休まず[illegible]眞面目に[illegible]んで居る、僕から讀書の自由を奪ふのは[illegible]から木を[illegible]と同じだ、併し牢に入つては牢に從へで、[illegible]何事も絶對的無抵抗主義が最上策だ、[illegible]きたい[illegible]が、アー云ふ金網の中では[illegible]から仕方が無い、[illegible]なしたとやら[illegible]いて居ら[illegible]ろう、會つたら宜しく言ふて呉れ給へ、[illegible]、堺、[illegible]、野澤、安中等の[illegible]に[illegible]はあろうが[illegible]福田女史によろしく、[illegible]もれ、二度と牢には入れられたろうな[illegible]してはイカンヨ、夫人によろしく、[illegible]田へ[illegible]ジャアン君の近況如何、[illegible]〳〵暑ふのは身体の事だから何とかして[illegible]を取るやうと[illegible]心つて居るが、どうも[illegible]だ、尤も[illegible]〳〵の[illegible]時になると直き近所の田圃で[illegible]、多少の風情[illegible]にしもあらずだが、併し之は牢外の[illegible]で牢の中には[illegible]にイヤな所だ、何時の間にやら夏が來た、之から[illegible]い事だろう、併し此の[illegible]り抜けて秋風ソヨ〳〵といふ[illegible]を吹く時に[illegible]山の[illegible]となるのだ（六月十八日石川宛）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

小說　**怖懼**

花明

花柳病！　梅毒!!
嘘言！　嘘言!!　嘘言!!
何？　何が罪だ？　何が罪障？　何か??
あのハイカラな、青二才！　籠絡!!　あ
れが何を知らふ！　何がわからふ?!　馬鹿
な！馬鹿な!!　馬鹿な!!!
梅毒！……かさ!!
膿！　黄色な、硫黄の粉抹をドロ／＼に
した様な膿!!　ドス黒い血の混つた膿!!プ
ーンと鼻を衝いて眩暈を起す様な臭気！
嫌！　嫌！　思ふさへ身の毛がよだつ、嫌
！　嫌!!　嫌だ!!
此、此の血！　此の血!!　此が如何して
私の家庭に入らふ？　何処から私の体に喰
ひ込まふ！　嘘言！　嘘言!!　如何しても
嘘言!!　あの痴つぺらな医師が何を知らふ
?!　何がわからふ?!
嘘言！　嘘言!!　嘘言!!

○

外は雨が降つて居る、淋しい、嫌な気持の
晩、せめて松山さん（看護婦）なりと話しに
来て下されば好いに……
わー嫌だ、あの燈、電燈、あの眩しい
光が嫌だ、頭の奥にジク／＼と喰ひ込むい
けない！　痛い!!　停電、そーだ、一寸で
も停電すれば好い、……せめて彼かあ
の電流を切つて呉れゝば好い、わー堪えら
れない、痛い！
ふと眼を閉ぢる、青い電球が眼の前を往
来する、二ッ！　三ッ！　糸の様な尾を引
いて通る、
と青二才、医師、白衣を着けたハイカラ
が出る、ニタ／＼と気味わるく笑ひながら
立つて居る、わー臭がする、甘つたる臭が
する！　あの臭、あの臭が嫌だ！

私は今日も口論してやつた、其の若さで
何がわかりますかと云つてやつた、何が解
るですさ、散々に言ひ詰めてやつた、
遺伝！　遺伝！　遺伝と云つた！
嘘言！　嘘言！　矢張嘘言!!　青二才が
出任せを云つたのだ、
私は祖父さんも知つて居る、祖母さんも
知つて居る、皆清い血を抱いて死んだ、純
潔な清い血を残して逝つて了つた、其の残
つた血それがお父さんだ、お父さんは確に
立派な血だ、肉だ、其から分れた私、その
私に、何処に汚れた処がある、お母さんだ
つて髪一筋落ちた事はない、ふき出物一つ
した事はない、嘘言！　遺伝とは真赤な嘘
言!!
今日もお母さん（姑）がゐらしつた、矢張
黒い、長い、立派な髪だつた、解帯に何の
異状もない、たつた昨夜も隣の嫁入の酒宴
に、高砂をうたつたとかおつしやつた、何処か
ら見ても嘘言だ、嘘！　嘘言！　青二才！
ハイカラ!!　医師!!　人を馬鹿にして居る
梅毒！　失敬な言葉だ、馬鹿な、馬鹿な！
あれでも医師？　医学士!!　??

○

今日も暮れた
あの日光　窓、硝石窓を透して来た
光白い、鋭いチカ／＼と来た光は嫌だつた
あー思つても恐い！
私は矢張り薄暗い　朦朧とした時が好い
永久に陰気な、影の様な処に居たい……
又、電燈が點いた、！　嫌！　嫌！　嫌な
光!!　淑様なりと来て下すつたら何日かの様
に消して貰ふに、如何したのだらう？　淑
様は、今日の新聞！　あの都新聞の記事が
真實だろうか？
大澤淑！　△△會社!!
誤報！　誤報！　乾度誤報!!
私が嫁てから一年、淑様は一度だつて宴
會の外に酒をあがつたり、他所に宿泊なす
つた事はないのだもの、嘘言！　乾度新聞
屋が嘘言を書いたのだよ！　新聞屋なんて
當にはなりやしない!!
妻！　艶子!!　妊娠!!
矢張淑様か知ら？　私も来月には……
……………………
若し淑様なら何故だろう？　如何しよう
?!　檜山さんも會社員は不節操だとおつしや
つた、何故左様なんだろう？　何故何故
!!　何故懸として妻のある身で？　今にも
可愛い小供が……
生死？　逐ふ！　逐ふ！　眼に其丈なら
私だつて済む、其の為めに私が嫁たのだも
の！　妊娠して居るのだもの!!……
何故？　何故！　何故あの汚れた、畜生
にも劣る女！　穢ない、醜者が好きなのだろ
うわからぬ！　私には其の心が少しもわか
らぬもう！　私が嫁になつたのか知、でも
此の前の日曜日には、早く大きな坊を見せ
て呉れつて云つてらしたのだもの、わから
ぬ、何故あんな不倫な事をなさるのだろふ
情慾？　肉慾！
何かにも書いてあつた、男は肉慾の奴隷だ
と書いてあつた、
そうだ、肉慾！　肉慾！　肉の奴隷!!
それに乗じたのだ、それを見込んだのだ！
玉子！　醜者!!　鬼!!　此の鬼が淑様を
弄ぶのだ！　憎い、憎い！　如何しよう!!
何程男だつて、あの汚れた鬼、鬼と……
……淑様も、淑様も……何故私では不
可ないのだろう？
鬼！、鬼!!　玉子！　泥棒!!　あゝ如何
しよう?!　如何しよう？

○

梅毒！　梅毒!!　梅毒!!
院長も確に梅毒だと云つた、確に耳下腺
に瘰粒が出来て居る、淋巴腺もふくれて居
る、瘰粒！　二ッの毒塊!!　出来るならば
えぐつて取りたい、あの、外科に使つて居る
小刀あれを一思にグザッと突込みたい、突
込、であれが除きたい、そして、そして毒
血！　あの毒血の塊を玉子！　そうだあの
玉子の顔に投げつけて遣りたい!!
グザッと突込む！　レコッと迸り出る血！
真紅な血!!　毒血！　あー毒血!!
けれども、けれども、駄目。　最早遅い
遅い!!　私の體内にある血、心の臓から四
肢の端々にまで流るる毒血、汚れた、汚れた
ドス黒い血、あー如何したら好いだろう!!
此の、此の髪も今に落ちる！　今に此の
髪も出なくなる!!　髪も落ち、鼻も出なく
なつたら如何しよう、隣の、隣の嫁の様に
なつたら如何しよう!!　私も今にあの様に
なるのだろう、院長は治ると云つたけれど
も嘘言。若し治るのなら隣の嫁はなぜ治らぬ
ね？　嘘言!!　嘘言!!　私も今にあの様に
なるのだ!!
いや！　いや!!　私ばかりでない!!　此
の此のお腹のを如何しよう!!　眼の見えな
い子　隣の八、あの八の様な子だつたら
如何しよう!!　一層　一層今此の腹をたち
わつて出して貰ふか、それでも育つ、来月
が何なのだもの、育つに定つて居る、
けれども、遅い！　矢張り遅い!!　私一
人の子ではない！、私が嫁ない前から淑様
の血は汚れて居たのかも知れない、あー如
何しよう、私は乾度、あの八、イヤ、何日
か見た乞食、――頬に大きな腫物が出来て
其から絶えず黄色い、臭い、そして血の混
つた膿が流れる様な子を生むに定つて居る
そして、髪の落ちた、鼻の出ない私は、眼
の見えない臭い、毒の塊！　そうだ其の子
と共に大澤家を逐はれるのだ。、それに定
つて居る!!　そして、そして其の跡にはあ
の玉！、玉子!!　あの醜者が来るのだ!!

今日もお母さんが、淑は二日ばかり宅へ
帰らぬと云つてらしつた、今晩は乾度、私
を逐へよ淑様に迫つて居るのだ。
死！　死！　死！　死！
そうだ、私には死より外はない。　前後
左右に系統を絶した毒塊だもの!!　ポッン
と生じた毒茸、そうだ、あの毒茸だ。今に
腐る！　膿!!　あの黄色い膿になるのだ！
嫌！　嫌！　嫌！
淑様は　淑様は何故、何故不義な不倫な
……………………
玉子！　玉子！　玉子！　口惜しい！
如何しよう　如何しよう
此の髪も！――此の髪も！　此の子!!
毒！　毒血!!　梅毒!!
？　？　？
！　!!　!!
!!　!!!　!!!
。　。　。　。　。　。
△月△日の深夜、△△會社員大澤淑の妻
艶子は、○○産科病院に於て精神に異状を
呈し、寝台から轉び落ちて失神した、そし
て其の翌朝死児を分娩した、
それは、立派な男の子であつた、
「完」

先驅者

豊[illegible]生

生活の保羅ばこ
得たと思ふのか
ぼろを纏ふた一人の女
監獄に引かれて警察の
ゾッとしそうな鐵門を
さも嬉しげな面持で
いそ／＼として潜り行く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生の日記

由美子

五月八日　土曜日　晴天

六時起床、身支度し學校へ行く。

第一時間目の體操の時間には一の組の身體檢査があつたので、私達二の組は體操をしなかつた。けれども其代りあまり騒いだので「四年にもなつて」と先生からお小言を頂戴してしまつた。二時間目は修身、あと二時間は裁縫であつた。

授業すむとすぐ裁縫室のお當番をした。床や机や腰掛など拭いてからガラスを拭く。土曜日は唯さへ廣い裁縫室の上にガラスまで拭くので大變だと思つて居たが爲て見ると何でもない、却つて勢がつくので、いつも遠いと思ふ途も元氣よく歸宅する事が出來た、一時すぎ歸宅してすぐ晝飯をすまし着物を着かへて江崎さんへ行く。

往つて見るとまだどなたもいらしつやらなかつたので、墨をすつて習字しなほしを出す。私は此前の土曜に學校の遠足で來られなかつたので、ぬけた所のお講義をうかゞふ。

そのうちに智恵さんが來らつしやつて、お講義と習字と丁度一緒にすんだ時廣瀨さんが來らつしやつたので、今日の所をかはり〴〵讀みはじめた。私は前の所を伺つたのに、又今日の所をするので少しねむくなつた。

其うち私の番が來たので讀みはじめた、六十三代つぎのみかどは冷泉院天皇と申しき。御いみなは憲平、これ村上天皇の第二の皇子なり。

すると憲平といふのを憲平と讀んだので先生は、「ケンペイさんではありませんよ、ノリヒラと讀むのです」と云はれたので、皆思はず笑ひ出しておかしくて後がよめなくなつてしまつた。大笑したおかげで、睡氣がさめた。

やう〳〵お講義もすみ歌の題を出していたゞいた。今度は卯花と新樹。廣瀨さんはお習字をなさつて居らつしやるので、智恵さんと一緒に先に歸る。

智恵さんは「今日は妹が居ないから、電車で歸る」と言はれたので、裏門をぬけさしてあげる。家の筍が大變生へた。電車まで送つてあげる、四時半歸宅。

今日はどうしても江崎さんのお習字のお清書をしなければならないので墨をすつて書く。

夕飯後、机に向つて雜誌をよんで居ると不意に弟が大きな聲で「やあ、孵つた雛が」といふので　そうつと行つて耳をすますと親鳥の腹の方でヒヨ〳〵といふ聲がきこえる。

さあ大變と妹と弟と私とで物置に行き此間掃除して置いた雛の小屋を持つて來る。フランネルを敷く綿でベッドを拵らへる、それから炭と貝とをこまかくして餌をこしらへなければならない。やれ寒くないやうにと小屋の下に行火を入れる。まだ支度がしきれない中に日は暮れる。ランプをつけて物置に箱をとりに行つたり、大さわぎ。

八時頃やう〳〵親鳥から出した、小さいのが二羽箱の方にうつし、あまり可愛いので様子を見て居た。

氣がついて見ると、もう九時。お風呂に入らなければならない。急いで入る、上つて紅茶をのみ、又鳥を見に行く。やう〳〵習字して十二時床に入る。

九日　日曜日　晴天

日曜だと思つたせいか大變おそく目がさめた。身支度をすませるとすぐ親鳥を見に行く。又聲がきこえたので手を入れて掴み出すと五羽居たので皆一緒に入れてやる。お仲間が殖えたのであつちでもこつちでもぴよ〳〵ぴよ〳〵。

もう私たちはうれしくてうれしくて、まるで氣違ひのやう、朝飯をすませると英語をさらふ。

九時半より小此木さんに行く、大切持たされた。

歸りて電車にて市谷見附で下り、すぐ琴に行く。人が一人も居なかつたので、すぐ教へていたゞき、十二時半歸宅。

歸つて見ると又一羽かへつたと云ふ。見ると又一羽か減ては居るが、少し早かつたと見えて毛がそろつて居ない。

でも綿でくるみあたゝめたら三十分程のうちにすつかりよくなつて、鳥らしいものになつた。

九つだかせた中八羽かへつたので實に大成功。

晝飯後つゝじの寫生をする、少しも畫けないので思はず「あゝ、ほんとに畫がかけない程いやなものはない。」と云ふと妹が「字が書けないのも隨分厭よ」と口を出されたので、だまつてしまつた。父上の歸られないうちにと急いで琴をさらふ。

夕飯後英語の練習をする。

八時頃一家そろつて紅茶をのむ。此時に皆がいろ〳〵な話をするのでなか〳〵樂しい。

裁縫をして居ると父上の歸宅。

あまりおそくなるといけないと思つたので、切り上げて、一時近く床に就く

◎人生の目的（一）

所謂本能主義の短所を論ず　　添田生

人生問題の解決は、人間不滅の信念に到達して始めて其究極の意義を明瞭にするものなり。而して人間不滅の信念は、人類生存の理由を強固にし、人類生存の理由は、生命發展の希望を生じ、生命の發展は實に社會歷史の根底なり。吾人は人類六千年の歷史を一觀して滔々たる生命の發展經緯を疑ふこと能はざるものなり。

古來國家民族の悲哀哀樂、存亡興廢を觀ふに一つに是れ生命の消長に起因すと曰ふも決して過言にはあらざるなり。

人は、生命の發展に、喜び樂み、國は榮え興るに比し、生命の消滅に、人も國も、泣き悲しみ・憂ひ、死し、亡び滅す。而して此死滅の苦痛より始めて覺醒の叫びを發する即ち無限を慕ふ人の子の叫びは是れ所謂革命なり。

然り而して此革命の絶叫は假然本能主義てふ名稱の下に出現せり。該主義者は云ふ人類は既に生存の理由を有す、吾生存の特權を有す、故に是れが永遠不滅の保障を要求するは必然の理なりと。彼等は更に進んで、人類の永遠不滅を保障するものは「營養」と「生殖」即ち「パン」と「戀」にありと宣言す。

人はパンを以て個人の生命を養ひ、戀を以て人類の生命を永續するものなり。故にパンと戀とは人類の生命を縱橫續なして永遠の昔より永遠の將來に永續せしむる人間本來の要求にして、自由且つ神聖なるものたらざる可らず。

然るに所謂文明の進歩と姑息なる過去の道德思想とは是等人間本來の要求に對して益々抑壓を加ふるのみにして、力弱き人の子は之れが束縛の下に苦悶しつゝ來たれり。而して其結果社會の惨狀は益々甚だしく「パン」と「戀」とに飢ゑたる野郎の數は日に加はり、夫れに伴ふ幾多の罪惡は益々猖獗を極め、社會は愈々暗黑より暗黑に進み殆んど停止する所なからんとするに至り、突如此苦悶の絶叫は其極點に達して破裂せり。人は「パン」と「戀」とに對する自由の要求を叫びて止まざるなり。

而して其叫びは政治的方面に於て社會主義無政府主義となり、文學的方面に於て自然主義となりて出現せり　是れ即ち今日の本能主義にして、該主義者の以て人生の眞意義となす所なり。

余輩は革命を好む、不完全なるものが完全になり、不善なるものが至善になる此意味に於ての革命を好む。而して今日の社會は決して完全なるものにあらず。今後完全たるべき餘地充分あり、而して是れを完全たらしむる爲めには必らずや或種の改革を要す是は一人余輩のみにあらずして恐らく闘改の常に此れを始め、世の識者の均しく認むる所ならん。此故に今日は一切の虚僞虚飾を打破して人類自然の面目を發揮せんとする本能主義に對して多大の興味と同情とを有するものなり。殊に今日是等の主義者が世の一部の人々より否認と侮蔑とを以て誤解されつゝあるを見るに於ては、衷心同情の涙なきを得ざるなり。

然れども吾人は未だ今日の本能主義に對して充分の滿足を表する能はざるものなり。

吾人は疑ふ。人類の本能は果して此くの如く單純なるものなりや。然り人類の眞生命は此の如く肉情的滿足を以て理想化し得る程、それ程單純なる淺薄なるものなりや否や。

吾人は如何にしても人類を所謂動物と同一視すると能はず、勿論吾人は進化論を信ず、然れども進化は決して動物の形態にのみ止まらず、其感情意識も同樣に進化したるにあらずや。

此に於てか吾人は信ず、人類の生命は單に肉のみにあらずして靈の生命あり。而して肉の本能と等しく靈の本能あり。此靈的本能の滿足せられざる限り、如何に衣食滿足相綴制度の改良其他を得ると雖も理想的生活は斷じて望むべからざる也。（未了）

統一新聞　毎旬一の日發行

一部金參錢　一ヶ年郵税共前金[illegible]錢

▲目下本紙の内容

●吾徒の主義　如先大不滅の大道の上に安住し吾内外界に於て革命的運動を爲す

●思想界　「思想界根底の「進化論」より觀たる社會主義」は先輩鑑然

●宗教界　教界の傑山本法華宗管長本多大僧正の「精神中心の信仰」は千古の傑觀

●政治界　義人田中正造翁と提携せる社員の「谷中村」觀察記は政治上人道上の大問題を暴露して痛快淋漓

●記者　▲主幹高橋大觀が神出鬼沒の怪筆を揮て斷じ來る記事は今日の異彩　▲主筆村田天籟は政論家として[illegible]　▲[illegible]

▲見るべき記事頗る多く毎號寫眞版數十個を挿入す▼

發行所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●カノー敷(東洋)一手販賣

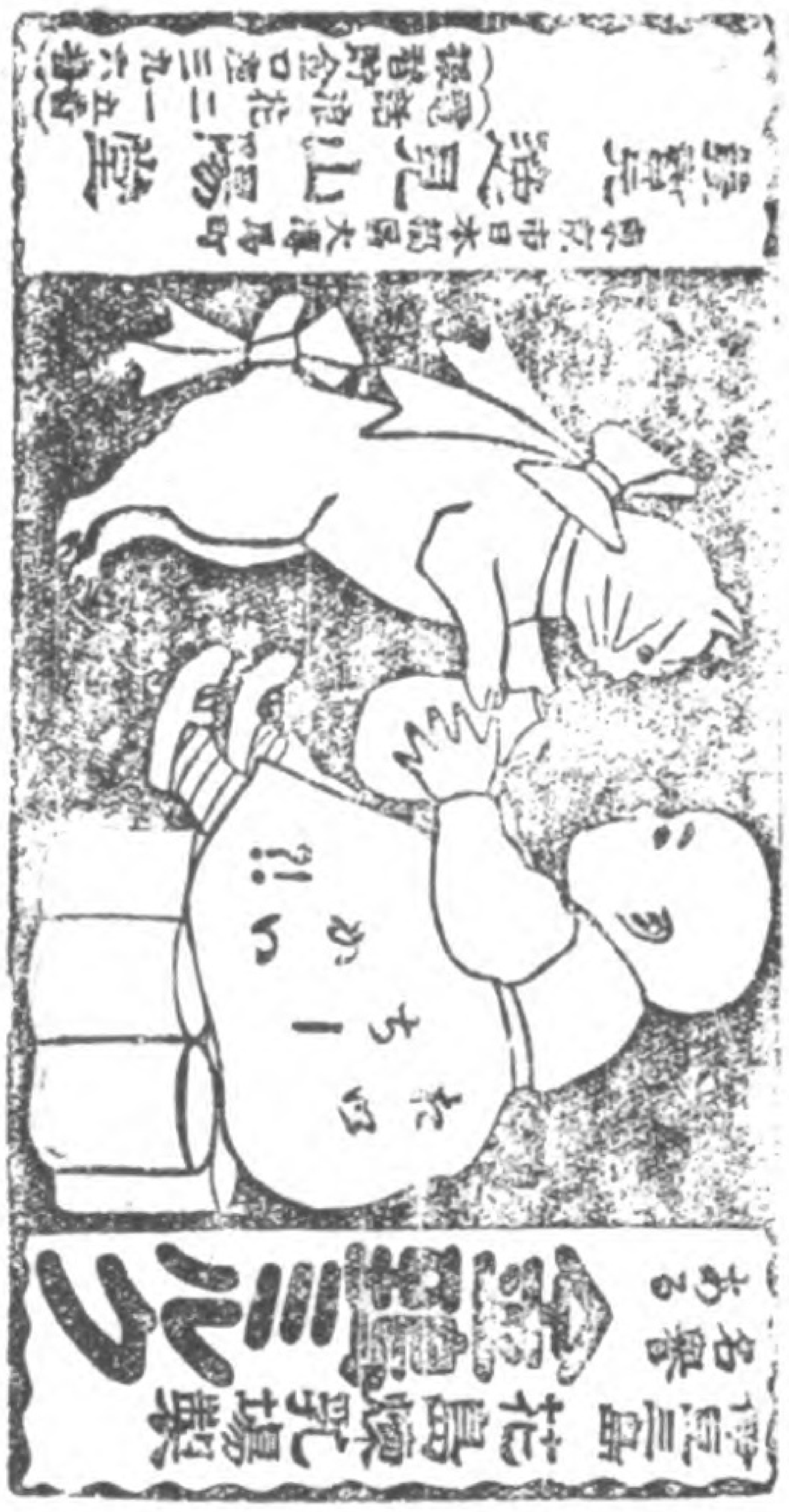
△カノー敷は一名衛生正座具と申します
△三本脚の低い椅子の樣なものでわります
△躰の重みが足にかゝらぬ樣に出來てます
△壹箇金五十錢以上いろ〱わります

綿糸 染糸 綿縫糸類 機 日之出印 鶯印 都糸類 紐類 壹切糸 カタン糸 レース糸

日本橋區大傳馬町二丁目廿五番地

糸問屋 村上商店

電話浪花二〇四二
振替口座三七九五



畫報 グラヒック

▲第十二號七月一日發刊

横濱開港五十年紀念祭(不折畫)
横濱開港五十年紀念祭委員及横濱市歌
今昔の横濱、開國の曙光(ペルリ上陸當時の光景)
横濱生絲檢査所、來遊の米國富豪ヒックス氏
井伊公及ペルリ銅像と作家藤田氏
京都に於ける米國前副大統領フエヤバンクス氏
新宮相岩倉公爵一日の行動
本邦寫眞師の開祖下岡蓮杖氏全國巡廻の途上
東本願寺入札の重なる骨董品
東方力士優勝旗祝賀會、麥酒は如何に造る乎
表慶館の内部、日蝕中太陽の斑點

定價 十錢 郵稅一錢 十部 金一圓 前金二十五錢

有樂社 東京有樂町 振替三六〇

三越吳服店は日本に於ける唯一のデパートメントストーアに御座候へば吳服太物は申すに及ばず。洋服、西洋小間物、化粧品、時計、指輪、靴、鞄、文房具、玩具、履物、櫛、笄類など流行品は勿論のこと。日用品を種々網羅致し居候故に御便利此上もなし。何卒多少に拘らず御用命被下樣奉願上候

THE DEPT STORE · MITSUKOSHI

三越吳服店

東京日本橋駿河町

三越吳服店

(振替貯金口座東京三〇〇番)

齒科治療 自午前八時 至午後十時

齒科醫 吉瀨才一郎

東京市神田須田町二十六番地(萬世橋內右横町)

●勞働者諸君に限藥價診察料共御隨意
●晝間敎業者の便利上夜間十時迄療治

涙紅醫院長

醫士 一瀨鷹一

一院 日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院 神田區連雀町十八番地

學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

小兒科 內科 婦人科

每日 自午前八時 至午後六時

淺草區馬道町二丁目

小牧醫院

自七月一日
至七月三十一日

天賞堂夏季大賣出し

神田本店 横濱

◉御購求額五圓に對し一等景品最高品切手百圓宛廿枚 二等景品同く五拾圓宛廿枚

◉御購求額壹圓に對し一等景品最高品切手廿圓宛廿枚 二等景品同く拾圓宛貳拾枚

一本〆カフタのなし 景品割合の詳細は七月一日の時事新報所載弊店廣告參照あれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY